



一つ目の神器を手に入れろ！

ゆつくりと目を開けた先には。

天井まで続く、巨大なガラスケースが広がっていた。

「え！ いま、どうやって移動したの!？」

ケースの中には、動物の標本がぎっしりとならんでいる。その毛なみもキバも、まるで本当に生きているみたいだ。

「ここ、来たことあるわ！ 科学博物館の三階よ。」

「おれも知ってる!」

玉照と草乃が、興奮気味に言った。八夜はオオカミを見て、顔をしかめている。

うす暗い部屋に、ケースの下から灯る青いライトが、夜空を思わせる。

まず目にとびこんでくるのは、ツノ。

とにかくいろんなツノを生やしたウシやシカたちと目が合う。

ケース全体を見れば、パンダやラクダ、オオカミやイノシシ、ゴリラやサルなど、百体をこえそうなほどたくさん動物たちがならんでいた。

そういえば、周りを見わたしても、館長の姿はない。

現場に來ないで、どこかから監視してるなんて、最近流行りのデスゲームのマスターみたいだ。

「ここには、いろんな哺乳類と鳥の剥製が集まっているんだぜ！」

「へえ、くわしいね？」

「もう何回も来てるからな。とくにこの部屋は、けっこう好きなんだ！」

大和は、スポーツタイプのターゲットルネックのえりをいじりながら、周りをながめている。

「意外。大和が博物館に行くタイプとは思わなかった。」

どちらかというと、外でずっとサッカーとか野球をしてそうに見える。

「まあ、強い動物のこととか、おもしろいことしか覚えてないけどな！」

そう言った大和の視線の先には、館内の地図があった。

この部屋へやの出入り口でいは、わたしたちの背後はいごにある、鉄てつの扉とびらだけだ。

それ以外いがいの扉とびらは全部ぜんぶ、灰色はいいろにそまつていた。

そばに【大地だいちにいる生命せいめい】というタイトルと【動物注意どうぶつちゅうい】という展示てんじパネルがあつた。

「わたしは、学校がっこうの遠足えんそくで来たことがあるけど、あんまり覚えてないな。」

青あおいライトと照明しょうめいにぼんやりと照てらされた、さまざま動物どうぶつたちが、いろんなポーズで

わたしたちを見みつめていた。いまにも動き出だしそうだ。

「まあ、夜よるの博物館はくぶつかんを好きすにすごせるなら、ちよつと楽しいかも。」

ほんの少すこし、ワクワクしてきた。

——**一つ目の神器じんぎが現あれる場所ばしょは、ガラスケースの中なかです。**

とつぜん、ガラスケースの中心ちゅうしんに、銀色ぎんいろの剣けんがまばゆく浮うかびあがつた。

「え、どういう仕しかけ!？」

——**それでは、ゲームスタートです。**

草乃くさのと玉照たまてるが、同時どうじにガラスケースへ走りはしりだした。

「ぼく、動物どうぶつは苦手にがてだ……。とくにオオカミはムリ。」

とつぶやいた八夜は、出入り口の扉のそばへ走っていった。

ガント 草乃がハンマーでガラスをたたき割る音。

ヴォオツ 玉照がガスバーナーでガラスをあぶり、水をかけて温度差でヒビを作る音。
博物館の中とは思えない音が、部屋にひびく。

「ガスバーナーまで準備してきたの!？」

「ひゅーすげえ! おもしろいなあ!」

となりで口笛をふく大和を、ちらりと見た。

「大和は行かなくていいの?」

「オレは、いまが楽しかったら、それでいいからな!」

大和は、楽しそうに草乃たちをながめながら言った。

「なあ、命は神器の剣について知ってるか?」

わたしは手元の本をパラパラとながめながら、首を横にふった。

「ううん、よく知らない。『古事記』について、学校ではくわしく習ってないから。」

「あの剣は、草薙の剣と呼ばれてるんだ。『古事記』には、スサノオって神様が、巨大

なへビの怪物を退治したとき、そのしつぽから剣を見つけたって書かれてるんだぜ。」

「へえ、くわしいね。」

「まあな！ あれは『勇気の象徴』って言われてるくらい、かっこいい剣だからな！」

大和が、得意げに鼻をこすつたとき。

パリンッ 草乃と玉照の攻撃にたえきれなくなったガラスが、いつせいにくだけ散つた。

「おれが先に行く！ 巫女お嬢はひっこんでろ！」

草乃が玉照をつきとばしてから、走りだす。

「きや！ 乱暴すぎますわ！」

イヌのような標本をとびこえた草乃が、剣のもとへ走つた。

「あれは二ホンオオカミって言つて、もう絶滅しちゃつてるんだぜ！」

「へえ。剥製つて本物みたいだね？」

「生きてた動物の皮を使つてるからな。中身をとりのぞいて、綿とかをつめて、生きていたときの姿に近づけてるんだぜ。」

「え、そうなの!? かわいそう。」

「そうか? 絶滅した動物を、生きてるみたいに見られるから、オレは好きだけどな!」

「たしかに、そう考えたら勉強になるから、いいことなのかも……。」「
草乃が、ひしめく動物の標本をたおしながら進む。」

「どけどけど! おれが勝つ!」

草乃が、剣を手にした瞬間――

フツと無数の気配がうまれた。

ふいに、視界のはしで、なにかが飛んだような気がした。

「いま、なんか動いた?」

目の前のニホンオオカミの耳が、ぴくりと動いた気がする。

「いや……まさかね……。」「

ガールルルツ　ワオ――ンツ

動物が、いつせいに吠えた。

「は?」

——言いわすれていました。

館長の機械のような声が、館内のスピーカーからひびく。

——この部屋の試練は、展示品が、神器を持った者を襲うことです。

ガラスケースの中で、キバをむき、ツメを立てて歩きだす標本たち。

——今夜に限り、この博物館の展示品たちは、記憶をとりもどし、もとの姿のころと同じように動きます。

「はあああつ!？」

「なんですつて!？」

「ふぎけんな！ いまになつて言うなよつ！」

「ぼく、ぼく、そんなの聞いてないよ！」

「おもしろいな！」

夜の博物館が、一瞬で獣たちの殺気にそまつた。

トラが低くうなり、ジャガーやクマがゆつくりと草乃をかこむ。

「くそ、なんだこいつら！」

顔を青くする草乃に、心拍数が上がる。

「や、やつぱり、ドツキリ企画だつたりしない？」

「アハハッ。命、これは現実だぜ！」

ガルルルッ 一匹のトラが、草乃にとびかかった。

「つぶね！」

間一髪、草乃は力強く跳んで、トラをよける。

空中でくるつと回転した草乃は、トラの背にひらりと飛び乗った。

「……はっ！ 体操選手をなめんなよ！」

そこからシカ、シマウマの背中へ、重力を感じさせない動きで飛び移る。

「すごい！」

でも、標本の群れは、次々と草乃を追いつめていく。

「くっ、キリがない！」

わたしは、草乃に向かつてさげんだ。

「草乃くん、剣を捨てて！ そしたら、狙われないから！」

「うるせえ、だれが捨てるか！」

剣の柄をにぎりしめる草乃の声は、ふるえていた。

「おれが勝つ！ 勝てない人間に価値なんてない！」

だめだ。この様子じゃ、草乃は絶対に剣をはなさない。

わたしはこぶしをにぎって、声をはりあげた。

「館長！ 草乃くんが食べられる！」

館長の姿は見えないけれど、どこかでこの様子を監視しているはずだ。

—— 標本ですから、食事は必要ありません。ですが、その筋力やアゴの力は、本物と変

わりませんので、気をつけてください。

たんたんと発せられた言葉に、背すじがこおる。

「動物が命をうばおうとしているじゃん！ ルール違反だよ！」

—— ルールは参加者のみに適用されます。展示品には適用されません。

「そんな！ ……このゲーム、法律と人権をムシしすぎてる！」

館長は、草乃を助ける気がない。

だれかが、助けないと。

「大和、草乃くんを助けるよ！ 手伝って！」

大和はきよとんと、小首をかしげる。

「なんで、あいつを助ける必要があるんだ？」

「え……だって、草乃くんは、動物に襲われてるんだよ？」

「ゲームにリスクはつきものだろ？ それを承知で、あいつはとびこんだんだ。どうなっ

てもしょうがないだろ？」

イヤミとかじゃない。大和は、純粹な気持ちで言ってるんだ。

「ま、まあそうだけど。でも、どんな人であろうと、傷つくのはダメでしょ！」

「え、なんでだ？」

不思議そうな顔で、くもりのない目をまたたかせる大和に、開いた口がふさがらない。

「傷つくのは痛いし、悲しいからだよ！ そんな思いをしないために、ルールがあるんだ

よ！」

「ふうーん。オレ、他人がどうなっても、まったく気にならないけどな！ それに、やつ

ぱりルールはつまんないぜ。」

くったくのない笑みを浮かべる大和。

だめだ、話がつうじない。

でも、頭のどこかでは、大和の言葉に納得してしまった。

結局、みんな自分勝手だから。自分のことだけを考えて生きてたほうが、楽だから。

——でも、わたしは、そうはなりたくない。

かしこく、正しく、冷静に！ が、わたしのモットーだ。

「ちなみに、あいつを狙ってる動物は、右から、トラ、ヒョウ、チーター、みんな肉食動物だぜ！」

物だぜ！

明るく解説する大和をスルーして、わたしはさげんだ。

「玉照さん、手伝って！」

ふり返った瞬間、ゾツとした。

玉照が、ハイエナの標本のそばで、じつと草乃を見つめていた。

その目は、狩りをする獣みたいだった。

「玉照さんには、たよれないな……。」

「オレ、ハイエナが好きなんだ！ 他の動物が狩ったエサをよこどりするイメージがあるけど、群れでちゃんと狩りをするし、骨までバリバリ食べちゃうくらいアゴが強くて、草原のそうじ屋って呼ばれてるんだぜ！」

いま、そんな話は聞きたくない。

八夜は、出入り口の扉の前で小型ゲームをしながら、こつちをチラッと見ているだけだ。

「ねえ、八夜くん——。」

「ぼく、動物は苦手なんだ。」

まだ何も言っていないのに、八夜はゲームから目もはなさず、食い気味に言ってきた。

「獣ども！ こつちに来るな！ 剣は渡さないからな！」

剣をにぎって走り回る草乃の息があがっている。

「勝たなきゃ価値がないんだ！」

自分に言い聞かせるようにさけぶ草乃が、気の毒に見えてきた。

わたしは将来、安定した暮らしができる公務員になるために、勉強をしてる。
目標を叶えるためには、受験で他の子と競って、いい点をとらないといけない。
でも、たとえ他の子に負けてしまっても、公務員になれなくても、ちがう目標を見つければいいと思ってる。人生は長いんだから。

だから、ここまで勝ちにこだわる草乃のことが、わたしにはうまく理解できなかった。
「……くそっ！」

とうとう肉食動物に全方位をかこまれた草乃。
ライオンが狙いを定めるように、低くふせて、じつと草乃を見つめた。
草乃の顔が、スツと青ざめる。

「やっぱ、百獣の王のライオンが一番かつこいいいな！」
大和の能天気な声に、耳をふさぎたくなる。

わたしはリュックから、塾のぶあつい参考書を取りだして、思いっきり投げた。

「てや！」

バサバサツ　一メートルも飛ばずに、参考書は床に落ちた。

ライオンはこつちに見向きもしない。全然だめだ。

「どうしよう！ 考えないと、考えなきや。」

ライオンをたおす方法なんて、学校でも塾でも習ってない。

投げやすいサイズの『古事記』をかまえた。

これを投げたところで、草乃が助かるわけじゃない。

たぶん、これはかしこい行動じゃない。

大和や八夜みたいに安全な場所で見えたり、玉照みたいに獲物のよこどりを狙ったり

したほうが、かしこい行動なんだと思う。

でも、なにもしないで見ていることは、わたしにはできない。

わたしにとつて、正しいことをしたい。

『古事記』を投げようとしたとき。

ヒラッ 古びた本から、一枚のページが落ちた。

拾おうとした、わたしより先に。

大和がそれをつかみ、ためらいもなく――

「えつ、ちよつ！」

ページのはしを、わたしの口につつこんだ。

「ふあにすんの!？」

「楽しめよ、命。」

ニカツと笑つた大和の顔が、やけに遠く見えた。

次の瞬間——ビリビリッ

口にはさんだページからうまれた、雷のような衝撃が身体中をかけぬけて。

のどをこがすような熱が、スーッとおりていく。

頭の中に、巨大なヘビがうねる光景が流れてきた。

【「サノオは、八つの頭をもつ大蛇に立ちむかい、酒でよわせて、剣で切りふせた。」】

幻の声と映像が、わたしの脳裏に焼きつく。

なにをすればいいのか、本能でわかつた。

口にはさんだページを、指先でつまめば。

ただの紙が、刃のような冷たさをまもっていた。



まるで、劍だ。

人差し指と中指ではさんだページを、顔の前でかまえる。
脳裏に浮かんだ言葉を、そのまま発する。

「神の力を、いただきます！」

すうつと息をすって、上から下へ、ページを劍のようにふりおろした瞬間――

ヴオンツ　空気がさけ、光の斬撃が走り。

目の前のライオンの標本が、真つ二つに切りさかれた。

ライオンの中から、白い綿や、古びた木の棒がとびでて、ゆっくりと床に散っていく。
もう、ライオンは動かない。

「え……いまの、なに!？」

ポカンと口を開けて、ふるえる手元を見つめる。

さつきまで光をおびていたページは、ボロボロの紙にもどっていた。